

被災地を結ぶ、伝える活動

# 伝承ロード縁

創刊号

## 震災10年の節目にオープン 石巻南浜津波復興祈念公園

福島県「富岡町3・11を語る会」

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

釜石「いのちをつなぐ未来館」の川崎さん

グラウンドゼロからの出発 宮城県女川町

石巻地域周遊伝承バスツアー

荒浜記憶の鐘（仙台市）





写真中央は伝承館、左奥に市民活動拠点、右奥に門脇小学校を望む

# 震災10年の節目にオープン

## 石巻南浜津波復興祈念公園

東日本大震災から10年の節目に、亡くなられた方への追悼および震災の記憶と教訓を後世に伝え、復興への強い意志を国内外に示す「石巻南浜津波復興祈念公園」が今年3月28日に開園した。

公園は石巻市南浜地区に整備。広さは38・8畝で国、宮城県、石巻市が連携して整備を進めた。南浜地区は津波と火災の延焼で約5000人の尊い命が失われた。震災の記憶と教訓を後世に伝え、国内外に復興への強い意志を発信することを目的としている。

震災前に住宅や商店が立ち並んでいた閑静な住宅街。震災で甚大な被害を受けたが、この地区の市街化が進む前の原風景として、池や湿地などを整備し、旧街路を残し、昔の居住地を思い起こせる空間としている。植栽も進み、将来的に公園は松原に囲まれる。

園内にはメイン施設の「みやぎ東日本大震災津波伝承館」がある。館内は主に九つのコーナーに分かれ、被災の実態や津波の怖さをパネルや映像にまとめ、緊急時の備えを学べるほか、宮城県内各地の語り部活動や地域再生に取り組みする団体、イベント情報などを紹

介し、各地への誘いを提供する。また、壊滅的な被害の中、救命救助など緊急対応した際のパネル・映像を掲示している。伝承館の周辺には、園内を見渡せる標高10mの築山「一丁目の丘」や、亡くなられた方々を追悼する場として「追悼の広場」「祈りの場」を設けた。

伝承館や追悼の広場の西側には「市民活動拠点」があり、市民団体が公園で活動する。拠点内は「がんばろう！石巻」の看板があり、春先には市民参加で植えられたチューリップやスイセンなどが咲き乱れる。

拠点内の「南浜つなぐ館」には「がんばろう！石巻」の看板付近の壊滅的被害を捉えた写真パネルなどを展示し、シアタールームも併設。震災学習プログラムで使われることもある。南側の「こころの森ハウス」では木工体験が楽しめる。その他、公園の近隣には石巻市震災遺構「門脇小学校」、

震災伝承交流施設「MEET門脇」もある。この地域に足を運んだら、じっくりと見て回りたい。

開園は午前9時～午後6時（10～3月は午後5時まで）、伝承館は午前9時～午後5時。いずれも無料。公園は年中無休だが、伝承館は月曜、祝日の翌日、年末年始は休館（毎月11日は曜日、祝日にかかわらず開館）。南浜つなぐ館も無料で午前10時～午後4時に開館する（不定休）。

連絡先は公園02225（98）7401、伝承館02225（98）8081、南浜つなぐ館については3・11みらいサポート02225（98）3691。



# 看板を制作した黒澤さん

「がんばろう！石巻」。震災の1カ月後この地に突如現れた看板が、被災者を励ました勇気づけた。やがて来訪者の立ち寄り先となり、追悼の場でもあり、復興に向けたシンボルとなった。

この看板を作ったのは黒澤健一さん(50)。震災から10年の間に看板は老朽化や公園整備で更新や移転があった。現在は3代目となる縦2m、横11mの看板が市民活動拠点に

設置されている。

配管工事業を営む黒澤さんは、自身の店舗兼住宅があった地に初代の看板を立てた。

この地に店を構えて1年2カ月での津波。震災直後は絶望しかなかったという。「1週間くらいして、復旧した電話で知人に、おれたちは生き残ったんだから頑張らなきゃ駄目だ、と言っている自分に気がいてね」と振り返る。がれきの中の合板を拾い集



「子どもたちの記憶に残る活動を」と語る黒澤さん

め、大工らの協力も得て看板を作った。しかし、地区はほとんど手つかずの巨大ながれきの山で行方不明者も数多くいる。「心のどこかに葛藤があった」というが、通り過ぎる被災者からは「頑張っているね」と声を掛けられ、看板に向かって手を合わせる人、ただ涙を流す人もいた。

「被災者全員にこのメッセージを届けられなくていい。まずは前を向ける人に、励みを感じてもらえれば」。横長の大きな看板は地区の背後に広がり、避難所のあった山からもよく見えた。

現在も仕事の傍ら、市民団体「がんばろう！石巻の会」事務局長として活動する。「市民活動拠点での私の取り組みが、公園後ろの復興住宅のアーバトから見られている。見られて恥ずかしくないよう襟を正さないと」と語る。

「津波に負けたくない、被災者を励ましたい、亡くなった方々の追悼」という当初の意識から、今は「次世代にどう伝え、何を残すか」の思いへ。「人生も後半、やれることは全部やろう」と決意を新たにしている。

## 創刊のごあいさつ



一般財団法人 3.11 伝承ロード推進機構

代表理事 今村 文彦 (東北大学災害科学国際研究所 所長)

東日本大震災から10年が経過しました。当時の苦しみや悲しみをいまだに忘れたことはありません。瓦礫の山に埋め尽くされた地域が静かに横たわり、自然の猛威に声を失いました。その中でも、変わり果てた地域から人命を救う懸命な活動、復旧・復興に一步一步に立ち向かう住民や関係者の姿は、新たな希望を与えていました。

一方で、日々の暮らしの中で、教訓や当時の記憶が薄れていくことを感じます。震災直後に復興構想7原則が提案され、第一原則として復興の原点(追悼と鎮魂)と教訓の伝承・発信と位置付けられました。今後も国内外で自然災害の脅威が続いている中、東日本大震災時の経験や教訓を後世に伝えることが当時に学んだ教訓を忘れないことであり、被災地を超えた地域の防災力向上につながると考えます。3.11伝承ロードの使命はここに 있습니다。ぜひ、皆さまと協力し活動を広げていきたいと思ひます。

思いを  
「発信」

# 語る人、聴く人、思い一つに

福島県「富岡町3・11を語る会」

福島県のNPO法人富岡町3・11を語る会は「かたリベ」を「語り人」と表現している。キーワードは「人」。語り人の東日本大震災での体験や思いがさまざまなら、それを聴く人もさまざまだ。生身の声を大切に聴いて聴く人も共感し、未来を一緒に思い描けるような活動を目指している。



お話を伺った方  
代表の青木淑子さん

震災の津波と、東京電力福島第一原発事故に見舞われた富岡町は2017年、一部地域を除いて避難指示区域が解除された。現在の住人口は約17000人。うち約8000人が元々の町民だ。

富岡町3・11を語る会代表の青木淑子さん(73)は「町民ながら他の所に住んでいる人が今も1万人いる。故郷への温

度差や意識の違いが気掛かり。帰還した町民にも取り外すことのできない心のバリエーションがある」と話す。

富岡町は原発事故で郡山市への避難を強いられた。高校の国語科教員を務めてきた青木さんは2004〜08年の富岡高校長を最後に定年退職。同市在住で震災時はデザイナー

も立ってもいられず支援活動を始め、富岡町民と再会した。12年、郡山市内に富岡町社会福祉協議会の施設が完成し、青木さんがアドバイザーに就任した。13年に社協の事業の

一つとして語り人活動が始まり、15年に語る会として独立。16年にNPO法人化。「人の駅」「核風舎」を運営し、避難住民の交流や語り人活動の拠点としてきた。17年には富岡町の避難指示区域解除で青木さんが町内に移住し、会の事務所も設けた。

## 町民劇や朗読劇も

同会は現在、富岡町と郡山市の2拠点で活動している。語り人の登録者は26人だが、高齢化で実際の活動は15人前後。最高齢は87歳、最年少は大学4年生だ。

「津波被害と異なり、原子力災害は人が流されていないし家も壊れていない。見えない放射線の恐ろしさと、避難を強いられ故郷を追われた思いを伝えるには語るより他ない」と青木さん。

避難先で新生活を始めても

コミュニティに受け入れてもらえなかったり、「賠償金をたっぷりもらったんでしょ」と心ない言葉を掛けられたり。だからこそ「事実をありのまま語る。正しい情報を語り継ぐ」と青木さんは力を込める。



高齢の女性が富岡町へ帰ることを決めて引越しをする様子と、家族それぞれの思いを描いた町民劇

「原子力災害を知ってもらおう、考えてもらおう。何よりも共感してもらおうのが大切」

同会の特徴的な活動として劇の公演がある。富岡町が今、直面することをテーマにした町民劇を19年1月に披露し、東京でも上演した。今年3月には広野町で朗読劇も行った。「スピーチと異なり、劇は作る側も見ると同じ場面で思いを共有しやすい」という。

青木さんは双葉町に昨年開設した「東日本大震災・原子力災害伝承館」での活動が多い。「『日本初の原子力災害伝承館にしよう』と語ると、みんなハッとしてくれる」。分かります、心に響く言葉が、聴く人に新たな気付きを与える。



被災地のフィールドワークで案内する青木さん(右)

# 未来へつなぐ



10月10日の活動に参加した中高生。学校や学年の垣根を越えて、思いを一つに震災伝承に取り組んでいる

## 中高生語り部ガイドが活躍

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

東日本大震災の津波が襲ったときそのまま、10年の歳月が過ぎた教室に来館者を案内する生徒の声が響く。気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館で語り部として活動する中高生たち。被災地に生まれ育ち、「震災をいつまでも語り継ぎたい」との思いを胸に、伝承活動に励んでいる。

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館は、同市の名勝、岩井崎の近くにあり震災時に津波が襲った気仙沼向洋高校旧校舎を震災遺構として保存。新たに整備した映像シアターや展示室、研修室、交流ホールで構成する震災伝承館を併設し、一昨年3月に開館した。地元の住民有志の他に、中高生も語り部として約70人が在籍する。昨年11月からは震災の月命日に近い土・日曜、祝日に中高生による館内の語り部ガイドを行っている。新型コロナウイルス感染症拡大による休館もあったが、「いつも10人から20人ぐらいの生徒が参加する」と担当職員の福岡麻子さんは目を細める。10月10日であった活動には12人が参加した。今春高校を卒業した専門学校生1人、中学生2人の他は高校生だ。最年少で大谷中1年の福岡未央さんは「自分は震災の記憶がないが、知っている限りのことをきちんと伝えていきたい」とはにかむ。生徒たちは2、3人ずつのグループに分かれ、ガイドを希望する来館者に付き添い、案内した。見学ポイントで来館者は、津波の爪痕を目の当たりにして時に顔をゆがめながらも、真剣な表情で生徒の説明に聴



旧南校舎4階の「津波到達地点」を案内する高校生3人。左から気仙沼高2年の熊谷礼さんは「共感してもらえる伝え方」、同校1年の末永詩真さんは「説明だけでなく相手への気遣い」、気仙沼向洋高1年の鈴木朔弥さんは「簡潔に、でもしっかり伝えるように」が案内のポイント

き入る。生徒たちはいくつかのポイントごとに交代しながら1時間かけて案内する。

### 知ろうとする心 大切

全員共通の案内書で勉強したり、下準備をしたりしているが、同じ見学ポイントでも生徒によって説明の仕方や熱の入りが少し異なる。身振り手振りを交えながらの生徒もいれば、あえて抑揚を抑えるかのように淡々と話す生徒も。それぞれの個性が垣間見られ、オリジナルの伝え方もあるようだ。福岡さんは「伝えたいものや発信の仕方に多少の違いがあ

る」と語る。今の高校生が震災を実体験として記憶する最後の世代だ。ともに気仙沼向洋高3年の佐藤瑞記さんは「時間のあるときは震災時の記憶を紹介している」、高橋瑠菜さんは「移動の際の雑談でも震災時の様子を伝えるようにしている」という。「案内を受けた皆さんはアンケートに、とても良かった、勉強になったと書いていただき、生徒たちのやる気につながっている」と福岡さん。「自分は震災を経験していないから語れない、ということはない。学ぶこと、知ろうとする心が大切」と強調する。

記憶を残す  
明日のために

# 日頃の防災教育が大切

釜石「いのちをつなぐ未来館」の川崎さん

リアス海岸の入り江にある釜石市鶴住居地区は東日本大震災で約11歳の津波が襲った。海の近くにあった鶴住居小と釜石東中は適切な避難活動で、学校監督下にあった児童生徒からは1人も亡くなった人を出さなかった。当時中学2年生だった女性は震災を振り返り、防災教育の重要性を実感している。



いのちをつなぐ未来館内で自分たちが避難した経過を紹介するコーナーに立つ川崎さん

三陸鉄道・鶴住居駅のそばにある釜石市の震災伝承施設「いのちをつなぐ未来館」職員の小崎杏樹さん(26)は地元出身。釜石東中2年生のとき震災に遭った。当時の記憶とそこで得た教訓や思いが、館内案内や語り部活動など今の仕事につながっている。

「学校にいて尋常ではない揺れに、津波が来ると直感した。毎年の避難訓練の通り、まずは校庭に逃げたが、点呼途中で先生からもう逃げろと。点呼の間聞らないんだと思った」  
学校から奥まったやや高台にある高齢者施設の駐車場に避難したが、「近所のおばあさんが、裏山で崖崩れが起きている。こんなことはこれまでにない。大変なことが起きる」と。さらに高台の高齢者施設に向け、小学生と手を取り合いながら逃げた。震災発生から30〜40分。ここで地区を覆い尽くす津波を目

の当たりにした。

さらに山の峠に逃げ、閉校した旧釜石一中への避難を目指し三陸自動車道を歩いた。「途中でダンプの運転手さんが、私たちを車に乗せてピストン輸送してくれた。うれしかった」と振り返る。

## 「避難が当たり前」

ポイントは二つ。点呼途中の「もう逃げろ」と、近所の人が発した「こんなことはこれまでにない。大変なことが起きる」。加えて、学校で毎年想定を変えて行っていた避難訓練や日頃からの防災教育がある。川崎さんは「避難することが当たり前だったとききつぱり」。

釜石高、山梨の大学を卒業し昨年4月から今の仕事に携わっている。同館は学校の見学受け入れが多く、川崎さんの説明を聴いた子どもたちから、教わったことを「自分も実践してい



釜石折りのパーク(左)と未来館の外観

たい」「家族にも伝えたい」などと感想が寄せられると、やりがいを感じるという。

「子どもへの防災教育が大事。子どもが動けば大人も動く。子どもの安全に関わることなら大人は動く。子どもが大人になったら防災の伝承につながる」と川崎さん。

「時間がたてば震災を体験していない人が増え、伝承に携わることやためらう人も増えるだろう。また聴く側も、体験していないのに語れるのと思う人が出てくるだろう。こういった心の垣根を取り外したい」と伝承の思いを語る。

# 公民連携で質の向上を

## グラウンドゼロからの出発 宮城県女川町



女川駅やゆほぼの完成を祝った「復興まちびらき2015春」

町の復興に向けた10年の歩みは、町長としての足跡でもあった。東日本大震災で壊滅的な被害を受けた宮城県女川町。その年の11月に就任した須田善明町長(49)は、復興の先の未来を思い描いたという。町長とはいえ1人では何もできない。行政と民間、町民が連携を図り、総力戦でのまちづくりとなった。



お話を伺った方  
須田善明町長

「長いようで、あっという間でもあった」。須田町長は開口一番、この一言に万感の思いを込めた。町は震災で最大約

15%の津波に襲われ、住宅の7割が壊滅した。

「この町に震災と無関係だった人はいない。われわれにとってグラウンドゼロ。破壊があったからこそ再生した。人は立ち上がらなければならぬし、実際に立ち上がった」と力強く語る。

震災時は地元選出の県議会議員。「町の復興に対し、将来誰が責任を取るのか。道筋の1歩目から将来世代として責任を担っていかう」と前町長の退任を受け、39歳で就任した。

「自分の世代にとって復興の過程と結果、10年後や20年後はリアルなものだ。10年後がどうかでなく、その先のための10年でもある」

町長就任前に町の復興計画が策定されていた(2018年度完了)。計画自体は大きく変更しなかったが、ゾーニングプランにはこだわったという。

「復興まちびらき2015冬」でシーパルピアや交流館がオープンした



ポイントは①スピード最優先でなく、質の向上を最大限求める②人口減少、人の流れを途絶えさせず、町の活力は落とさない③行政だけでなく民間も担う(公民連携)だ。

### 活動人口を増やそう

「女川はベッドタウンではないし、そもそも定住という概念も変容しつつある。人口減少も不可逆なわが国全体の潮流。ならばこの町に関わってくれる活動人口を増やしていこう」

高台造成や盛り土、災害公

営住宅や水産加工団地の整備などはもちろん、動線の集約やコミュニティの確保が新たなまちづくりの鍵となった。

そのエポックとなったのは2015年3月に温泉温浴施設「ゆほぼ」と合築した女川駅が完成し、JR石巻線が4年ぶりに同駅まで全線開通。同年12月には民間のエリアマネジメントを導入した駅前商業エリアに30店近くが軒を連ねる「シーパルピア女川」と、町民や来町者が気軽に立ち寄れる「女川町まちなか交流館」がオープン。この一帯は震災前以上の人の流れが現れている。

「まちの復興を自分事と捉えるまちづくりのキーマンになってくれた人たちがたくさんいた。町民と一緒に進めることができたのが誇り。震災がなければ得られなかった経験や出会いがある」

町の復興はこれからも進む。「人の生きる力の強さを発信していきたい。人生に悩んだとき、復興した被災地に立ち『もう少し頑張ってみよう』と思ってもらえるような、町をポジティブな震災伝承の場にしたい」と未来を描く。

# 学ぼう! 震災の記憶と教訓

## 石巻地域周遊伝承バスツアー



「3・11伝承ロード推進機構」が石巻地域を周遊する伝承バスツアーを11月25日から来年2月12日までの30回実施している。この伝承バスツアーは、宮城県東部地方振興事務所がマイクツーリズムに焦点を当てた日帰りバスツアーとして、実績がある当機構に委託した事業で、「震災の記憶と教訓を伝え継ぐ」をテーマにしている。

この日帰りバスツアーは、仙台駅を起終点として、女川町から石巻市、東松島市を巡るコースとなっており、「3・11伝承ロード」のロゴマークをラッピングした大型観光バスが石巻地域を快走する防災と伝承の旅だ。石巻南浜津波復興祈念公園内に今年6月、開館した「みやぎ東日本大震災津

### 日帰りバスツアー行程

時間	行程	備考
9:00	JR仙台駅東口 出発 移動	
10:20~ 12:30	シーバルピア女川 震災遺構「旧女川交番」を見学します。その後「まちなか交流館」で女川町の復興について学びます(その後、まちなか交流館で弁当の昼食)。 移動	【復興】 (昼食)
13:00~ 14:15	石巻南浜津波復興祈念公園 東日本大震災の記憶と教訓を後世に伝える「石巻南浜津波復興祈念公園」を見学します。その後「みやぎ東日本大震災津波伝承館」の震災伝承の展示を通じて、津波から命を守るための行動の重要性を学びます。 移動	【伝承】
14:45~ 15:30	東松島市東日本大震災復興祈念公園 「震災復興伝承館」の展示・映像を視聴し、「震災遺構旧野蒜駅プラットフォーム」を見学します。	【伝承】
15:30~ 16:10	防災集団移転事業 野蒜ヶ丘団地 語り部さんから移動中のバスで車内説明をしていただき、車窓からまち並みを見学します。 移動	【復興】
17:00	JR仙台駅東口 到着 解散	

波伝承館」をコースに含む。県と同機構は「多くの方にツアーにご参加いただき、震災の記憶と教訓の伝承を学んでください」と呼び掛けている。

定員は各回20人(最少催行10人)で参加費5000円(弁当込み)。申し込みは電話かウェブサイト、またはウェブサイトで。(QR)で。

申込先は近畿日本ツーリスト仙台支店伝承ロードバ

ウェブサイト▶



催行日	
1月	12~15日 20~22日 26~29日 (11回)
2月	2~5日 9~12日 (8回)

ツアー係022(222)4141、ファクス022(221)6188。  
行程は別表の通り。

### 表紙

## 被災地を歩く



## 鎮魂の祈り ささげる

## 荒浜記憶の鐘(仙台市)

季節は確実に移り変わる。春まだ浅く、冬の寒さを引きずった“あの日”から四季を繰り返し、10年の節目を迎えた2021年も、もうすぐ終わる。

師走の空を背景に立つモニュメントに、まるで天からの贈り物かのように雪が舞い降りた。

仙台市若林区の深沼海岸そばにある「荒浜記憶の鐘」。周辺には二つの震災遺構もある。「仙台市荒浜地区住宅基礎」と「仙台市立荒浜小学校」だ。

震災前、この地は住宅街が広がり、夏には多くの海水浴客でにぎわった。震災の津波はここでも猛威を振るい、多くの人の暮らしを、そして尊い命をのみ込んだ。

荒浜記憶の鐘は震災で亡くなった方々をしのぶモニュメント。高さ4mの人型をした柱は「平穏」「水平線から昇る日の出

「復興」をイメージしている。柱から続く飛び石の先に、この地を襲った津波の高さを刻んだ球体の石碑がある。

13.7m。柱から石碑までの距離でもある。一歩ずつ踏みしめ、防潮堤を乗り越えた津波の高さを実感する。

柱の青銅の鐘を鳴らし、鎮魂の祈りをささげる。月命日にはかつての住民が訪れ、往時をしのびながら鐘ひもをゆっくりと引く。

「カーン、カーン」。師走の空に鐘が響く。愛する人や懐かしい古里への思いを込め、そして来年また一歩、復興が進むことを願って。

